

令和元年度 奈良市立三碓幼稚園 研究実践概要

園長名 藤次 啓順
全園児数 27名

1. 研究主題

「心ゆさぶる体験活動を通し、生きぬく力を育む園児の育成」

2. 研究年度

3年度

3. 研究主題設定理由

前の年に比べ、今年度は園児が減り、来年度はさらに減少する傾向にある。核家族が多く、家に帰っても習い事などがあり、戸外で思いっきり体を動かし友達や人と関わって十分に遊ぶ時間や経験が少ない。また、経験不足からか、すぐに人に依存してしまうなど自信のなさがうかがえる。前年度の課題に引き続き「ひと・もの・こと」との関わりを通し、豊かな心を育み、自信をもって意欲的に活動する幼児を育てていきたいと考え引き続き主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

幼児が身近な『ひと・もの・こと』と関わりの中で、心揺さぶる体験活動をとおり、子どもが意欲的に取り組み、生きぬく力を育むための保育内容の充実を図る。

②研究の重点

○幼児のありのままの姿や育ちをとらえ、一人一人に応じた援助の在り方を探る。

○子どもが主体的に、生活や遊びの中で心動かす豊かな体験をするための環境構成の在り方や援助のあり方を考える。

○保護者や地域、小学校との連携を深め、豊かな心を育む保育内容の充実を図る。

③活動の方法

4歳児

【色水遊びしたい】

4歳児5人のクラスのため、入園当初から5歳児と一緒に、交流しながら遊んでいる。5歳児が昨年の経験から色水遊びを始めるとその様子をじっと見つめていたが、5歳児の遊びに入ることができにくかった。数日後、4歳児のみで園庭に出ると、「あれしたい」と色水遊びの道具を指さす。一緒に色水遊びの道具を準備すると、5歳児の見様見真似で色水遊びが始まった。5歳児から刺激を受け、同じようにすり鉢に花を入れ、すりこぎでギュッギ

ユッと花をつぶしながら色を出す子、すり鉢に花と水を入れ押しつぶさずに、すりこぎでくるくる混ぜるだけの子、好きな色の花ばかりを入れる子など様々な姿が見られた。途中、なかなか色が出ないことに気付き花を足したり友達の様子を見たりしながら花をつぶすと色が出ることに気付き「ギュッギュッてしたら色がでるよ」と話す。その様子を見に来た子も「やりたい!」と色水遊びを始める。



<評価>

- ・友達や 5 歳児の刺激が受けられるような環境をつくり、交流できるような場を大切にすることで、周りに目を向け「おもしろそう!」「やってみたいな」という思いが膨らみ「色水遊びをしたい」と思う気持ちにつながった。また、5 歳児の中にはなかなか入れない子どもも、4 歳児だけで遊ぶ場や時間を設定したことで、安心してじっくり遊んだ。
- ・保育者がやり方を知らせるのではなく、5 歳児との関わりの中で知ること、遊びを伝承する姿が見られた。また、保育者が個々に遊んでいる子どもたちのつぶやきや、思いを橋渡しすることで周りの友達の様子に気付き、色の変化や目的などそれぞれの感じ方や楽しみ方で色水遊びをした。

【すぐろく考えた】

冬休み明け、子ども達と一緒に正月遊びをする。1月の月間絵本にあったすぐろくをクラス全員5人で遊ぶと家庭で経験していない子もすぐろくのやり方が分かり、すぐろくに興味を持った子も多かった。その後も、保育室にある色々なすぐろくを出して、数人でしたり、クラス全員でしたりする。何日かすると「ちょっと待って」と紙とペンを出し、すぐろくの止まった場所に書かれている内容を見ながら、自分達でも考えて紙に書き適当な場所に置く。「〇〇くんこんなこと考えたよ」と伝えると、「面白いね」と話しながらしている。またしばらく遊ぶと「あ!ここに置くわ」とすぐろくの2こもどると1回休みになる場所に「2こもどる」の紙を置いたり、ゴール付近に「スタートにもどる」を置いたり、数を数えながらどこに置くのかを考えていた。実際、置いた人がスタートにもどったりして「がっくり」することもあったが、自分で内容を考えて書いた紙を置くことが楽しくなり、「みんなでうどんパンの歌を歌う」「☆の所までワープする」などいくつも内容を考え、置きやすいように小さなゼリーカップに貼ったり、小さい空き箱で人をつくり、「この人の所に来たらスタートに戻るだよ」と友達に知らせたりしながら遊ぶ。その後もさいころを2個に増やしながらか自分達で考えるすぐろくを楽しんだ。



<評価>

- ・冬休み明け、家庭で経験した正月遊びがクラスでも楽しめるよう環境を用意したことで、こま回しや羽根つき、カルタ、すぐろくなどの伝承文化に興味をもった。また、少人数クラスのため、全員で同じ経験をしたことですぐろくのやり方が分かり、同じ思いで共通の遊びを楽しんだ。また、友達にやり方聞き、一緒にマスに書かれている文字を読んだり、サイコロやマス数を数えたりすることで文字や数にも興味が出てきている。
- ・保育者も子ども達と一緒にすぐろくに参加し、1人が考えたアイデアを周りに広めたことでそれぞれがマスに書かれている内容を考え、紙に書いてすぐろくに置く姿に繋がった。また、友達の刺激を受け、みんながどんな内容が楽しくなるのか、どこに置けばいいのかなど

を考えながらつくった。

【2階から一番下まで転がそう】 5歳児

雨の日が増え園庭で遊ぶことができない日が続いたため、ジャングルジムで水路を作る遊びの代わりに階段を使って転がし遊びを始める。真っ直ぐ転がすだけではすぐに面白くなく、段ボールやトイ、大型積み木を持って来て、「2階から転がそう」「ここでぐるっと回るようにしたいねん」とコースを長くして楽しんでいる。その中で毎回失敗する場所がでてきたため保育者が「どうしてここで失敗するのか？」と聞いてみると「ここでスピードが出るから曲がらないのかな」「テニスボールは重いから落ちるのかな？」と、曲がり切れない原因を考えだした。その後友達同士話し合っ、どうしたらうまく曲がって下まで転がっていくのか色々な方法を試して工夫する。テニスボール、スーパーボール、ピンポン玉、ビー玉など大きさや重さの違うものを転がしたり、トイの連結部をうまくつなげたり、コースから飛び出さないように壁を立てたりしながら何度も挑戦し、ついにトイの角度や壁の位置を調節してピンポン玉でならうまく曲がって下まで転がらせることができた。



<反省と評価>

- ・雨の日の遊びを工夫して自分たちで遊びの場を広げ、それぞれが思いついたことを試しながら遊び進めることができた。自己主張が強く自分の思いを優先してなかなかお互いの意見を聞き入れにくかったが、担任が疑問を投げかけ課題を明らかにしたことで時間をかけながらコースをつくり、自分の意見を主張したり友達の思いを受け入れたりしながら目標を達成することができた。
- ・何度壊れてもやり直しながら最後まで諦めずに取り組み、友達と一緒に成功した時の喜びを共有し、一緒にやりきる楽しさを味わうことができた。

【凍ってるのと凍ってないのがある！】 5歳児

一月、寒くなった日に園庭にみぞれが降り出し、子どもが手のひらに落ちてくるみぞれの冷たさを感じて「雪だ！めっちゃくちゃ冷たい！凍りそうや！」と話す。その言葉から去年の経験を思い出し、「先生、今日帰りに水を貯めよう。明日氷になってるよ」と提案する。そこで他の子ども達も思い思いの入れ物に水を張って楽しみにしていたが、翌日登園してカップの中を確認しても凍っていない。何日か凍らない日が続いたため保育士が「なんで凍らないのかな」と残念そうに感想を伝えると、原因を考えて置き場所を変えたり、本で調べてカップの中に花びらやドングリを入れたり、絵の具で色をつけたりしてそれぞれに「実験だ！」と楽しみはじめる。「今日は寒いから絶対凍ってると思ったのに」「一番に見たいから早起きしてきたよ」とワクワクしながら待ち、とうとう凍った日に確認するとそれでも凍っているものと凍っていないものがある。「どうして同じカップなのにこれは凍ってないの？」

「花びらが一緒に凍ってる！」「上の方だけ凍ってるけど下は水がめっちゃ冷たい！」とそれぞれ感じたことを話したり友達と一緒にのぞき込んだり触ったりして楽しんだ。保育室にある氷の絵本を友達と一緒に調べて、「こんなバケツに入れたらいいのかもね」「今度はプールを凍らせてスケートしよう」と、興味がさらに広がった。



<反省と評価>

・凍るほど寒い日が少なく、広がった興味を継続して観察し続けることはできなかったが、氷の絵本や素材の違う入れ物などを用意することで冬の環境に興味を持ち自分で調べたり友達と話したりしながら楽しむことができた。

・どうして凍らないのか、どんな工夫をしたら凍るのかなど問題解決に向けて考えを伝え合ったり、本を見て調べたことを実際やってみて自分で確かめたりすることができた。

5. 研究の成果

○日頃から、行事や活動を一緒に行い、お互いに親しみがてるような活動をしてきた事で遊びの場でも自然な交流が見られた。また、子ども達が「もの」と関わり「やってみたい」と感じる興味や感心を見逃さず、必要な素材や環境を用意したり時間を保障したりすることで意欲的に遊ぶ姿につながった。

○保育者が一緒に遊ぶ中で、友達の思いを橋渡ししたり、時には、助言したりする事で、子どもは、自分の思いを伝えたり、友達の思いを受けいれながら友達と協力したりして、試行錯誤しながら目標に向かって意欲的に遊ぶ姿が見られた。生き抜く力を育くむ基礎である「ひと」とのつながりは欠かせないと考える。保育者は幼児との間に信頼関係を結ぶ事で、その安心感から主体的に遊ぶ力につながった。そのためにも、子どもをよく理解し、一人一人に応じた保育者の援助が大切であると確認できた。

6. 今後の課題

来年度は園児数が激減し、これからは、「ひと」との関りや、「もの」「こと」に出会い家庭では味わえない豊かな経験がさらに必要になってくると思われる。

今後も、家庭や地域の協力を得ながら、子どもが主体的に「ひと・もの・こと」に関わり、より豊かな体験を積み重ねていけるような保育内容と保育者の資質向上に努めていきたい。